

秋 季	一 般	国文学専攻（修士）	選択科目（1）
			以下の三問の中から一問を選び、【Ⅰ】は日本語に、【Ⅱ】・【Ⅲ】は現代語に直しなさい。
			※解答用紙には、選択した問題の番号を明記せよ。 ※【Ⅰ】は英語の辞書の持ち込みを認める。
			【Ⅰ】
			< 本文略 >

秋 季	一 般	国文学専攻（修士）	専門科目
			解答用紙には、選択した問題の番号を明記すること。
			【Ⅱ】次の中から一題を選び、一〇〇〇字以上で論述せよ。
			① 万葉集
			② 古事記
			③ 私家集
			④ 読本
			⑤ 自然主義文学
			⑥ 外地文学
			⑦ キリシタン文献
			⑧ 第二言語習得
			【Ⅲ】次の中から二つを選び、知るところを述べよ。
			① ヤマトタケル
			② 古今和歌集
			③ 松尾芭蕉
			④ 樋口一葉
			⑤ ヘボン

【Ⅱ】

今昔、丹波の国の郡に住む者あり。田舎人なれども心に情有る者也けり。其れが妻を二人持て、家を並べてなむ住ける。本の妻は其の国の人にてなむ有ける。其れをば静に思ひ、今の妻は京より迎へたる者にてなむ有ける、其れをば思ひ増たる様也ければ、本の妻、「心疎し」と思てぞ過ける。

而る間、秋、北方に、山郷にて有ければ、後の山の方にいと哀れ気なる音にて鹿の鳴ければ、男今の妻の家に居たりける時にて、妻に、「此は何が聞給ふか」と云ければ、今の妻、「煎物にても甘し、焼物にても美き奴ぞかし」と云ければ、男、心に違ひて、『京の者なれば、此様の事をば、興ずらむ』とこそ思けるに、少し心月無し」と思て、只本の妻の家にきて、男、「此の鳴つる鹿の音は聞給ひつか」と言ひければ、本の妻此なむ云ける、

われもしかなきてぞきみにこひられし、まこそこゑをよそにのみきけと。男此れを聞て、「極じく哀れ」と思て、今の妻の云つる事、思ひ被合て、今の妻の志失にければ、京に送てけり。然て本の妻となむ棲ける。

思ふに、田舎人なれども、男も女の心を思ひ知りて、此なむ有ける。亦、女も心ばへをかしかりければ、此なむ和歌をも詠ける、となむ語り伝へたとや。

【Ⅲ】

項王軍壁垓下。兵少、食尽。漢軍及諸侯兵、囲之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」項王則夜起飲帳中。有美人、名虞、常幸從。駿馬、名騶、常騎之。於是項王乃非歌忼慨、自為詩曰、

力拔山兮氣蓋世

時不利兮騶不逝

騶不逝兮可奈何

虞兮虞兮奈若何

歌數闋、美人和之。項王泣數行下。左右皆泣、莫能仰視。

2026 年度 大学院入試（出題意図、解答例）（国文学専攻）

■ アドミッション・ポリシー

奈良大学文学部における学位授与の方針（D P）で掲げている、①知識・技能の理解と活用、②問題発見・解決力、③多様性の理解、④コミュニケーション能力、⑤自律的で意欲的な態度、のいずれにも合致する能力を持ち、自らの研究を計画的に推進できる能力を持つ人材を受け入れる。以下、各専攻で定める能力をそなえていること。

1. 日本文学・日本語及びそれらに関連する文化的諸領域について、基礎的な知識をもち、かつ主体的に研究していける人。

■ 各専攻ごとの評価のポイント

【国文学専攻】

- ①日本文学・日本語及びそれらに関連する文化的諸領域について、基礎的な知識を有しているか。
- ②基礎的な知識をもとに、専門知識を習得し、多様な観点からものごとを理解・分析できる能力を有しているか。
- ③自らが設定した研究テーマを計画的かつ主体的に推進できる能力を有しているか。

出題の意図

当該試験科目は、本学文学研究科のアドミッション・ポリシーを踏まえ、以下を評価基準として、計2題を出題した。

- ① 日本文学・日本語及びそれらに関連する文化的諸領域について、基礎的な知識を有しているか。
- ② 基礎的な知識をもとに、専門知識を習得し、多様な観点からものごとを理解・分析できる能力を有しているか。

以下、設問ごとに出题の意図と評価基準、及び模範解答（例）を示す。

専門科目

【一】次の中から一題選び、1000 字以上で論述せよ。

- ① 萬葉集 ② 古事記 ③ 私家集 ④ 読本
⑤ 自然主義文学 ⑥ 外地文学 ⑦ キリシタン文献 ⑧ 第二言語習得

〈出題の意図〉

- (1) 日本文学・日本語及びそれらに関連する文化的諸領域について、学士課程終了レベルの学力を有しているか。
(2) 専門分野に基づく豊富な知識を有し、具体例を用いながら説明できているか。
(3) 適切な文章表現を用いて、論理的に説明できているか。

〈模範解答例〉第二言語習得

自身の母語（第一言語ともいう）以外の言語を習得することを「第二言語習得」という。第二言語の後に習得する言語は第三言語、第四言語などとすることもあるが、母語以外はすべて「第二言語」ということが多い。別に、学ぼうとする言語（目標言語）が日常的に使用される環境での習得を「第二言語習得」、目標言語が日常的には使用されない環境での習得を「外国語習得」として区別することもあ

る。
第二言語の学習者が一定の段階までに習得した目標言語を、「中間言語」と呼ぶ。中間言語とは、母語と目標言語のあいだにある言語という位置づけからの命名であるが、目標言語の習得の度合いという点で見れば、ほぼゼロの段階から母語レベルに至るまで様々な段階がある。いずれの段階においても、中間言語は、少なくとも次の2つの特徴を抱えている：①母語の影響（転移）、②学習者が独自に構築した特徴。①母語の影響は、すでに身につけた母語の特徴が中間言語に現れたものである。日本語を学ぶ英語母語話者を例にすれば、「小野さん」と「大野さん」のような母音の長短で単語を区別することができない（発音レベル）、「犬が走っている」と「犬は走っている」の意味の違いが理解できない（文法レベル）、否定疑問文「あしたは来ないのですか」に対して「いいえ、来ません」と答える（語用レベル）など、様々なレベルに現れる。②学習者が独自に構築した特徴は、「過剰一般化」に顕著に観察される。過剰一般化とは、母語話者の規則が適用されるべきところを越えて適用された場合に言及する用語で、たとえば「走る」からその否定形「走らない」を作り出す規則を「見る」や「寝る」にも適用して「見らない」「寝らない」のような形式を作り出す操作をいう。このような中間言語に観察される特徴は、以前は「誤用」と呼ばれていたが、現在の第二言語習得研究では誤用という捉え方はしない。学習者がある段階までに構築した規則や特徴の束、すなわちひとつの言語として位置づける。

中間言語の研究は、これまで、様々な言語項目について、以下のような様々な観点から分析が進められてきた。(a) 目標言語の習得プロセスは、学習者ごとに異なるのか、それとも、学習者間で共通するところがあるのか。(b) 学習者ごとに異なる場合、それはどのような要因によるのか（母語、習得開始年齢、性格、インプットの種類、習得環境など）。(c) 学習者間で共通する場合、その習得のルートはどのようなものか、それはなぜか、など。

近年の日本語母語話者は、教育機関での外国語の授業や、国外での長期滞在（留学・企業からの派遣）による外国語の習得など、外国語を習得する機会が増えている。また方言にも目を転じれば、転校や進学、転勤などによって他地域に移住し、移住先の様々な方言を習得する機会も多くなっている。このような社会的背景において、第二言語習得、第二方言習得の研究はますます重要性を帯びている。

【二】次の中から二つを選び、知るところを述べよ。

- ① ヤマトタケル ② 古今和歌集 ③ 松尾芭蕉 ④ 樋口一葉 ⑤ ヘボン

〈出題の意図〉

- (1) 自分の研究分野に関わる事項について、専門的な知識を有しているか。
- (2) 自分の研究分野以外の事項についても、幅広く基礎的な知識を有しているか。
- (3) 知識を的確に整理し、わかりやすく説明する能力を有しているか。

〈模範解答例〉ヘボン

江戸末期から明治中期にかけて日本に滞在したアメリカの宣教師・医師。医療に従事するとともに、日本語の研究やキリスト教の普及にあたり、さらには日本の教育にも尽力して明治学院の初代総理となった。具体的には、日本の最初の和英辞典である『和英語林集成』を編集、改定し、その過程で従来のローマ字つづりを整理してヘボン式ローマ字を考案したこと、また、聖書の翻訳委員の一人として、新約聖書と旧約聖書の和訳に従事して完成させたことなどが業績としてあげられる。いずれの業績も、その後の日本の言語や文学、その研究に与えた影響は大きい。

選択科目（英語、古典、漢文から試験当日に1題を選択）

【Ⅰ】

【Ⅱ】

【Ⅲ】『史記』

〈出題の意図〉

- (1) 出題された文章の内容を正確に理解できているか。
- (2) 適切な語彙を用いて翻訳文、または現代語訳を作成できているか。

〈模範解答例〉

※ 著作権の関係上掲載できません。